

# 日本ラテンアメリカ学会 会 報

№ 33

1990年4月20日

## 第33号 目 次

1. 理事会報告
2. 会員活動報告
3. 学術・文化情報
4. 近着会員業績
5. 事務局から
  - ラテンアメリカ研究センターめぐり
  - 海外ラテンアメリカ研究センター紹介

## 1. 理事会報告

○第44回理事会議事要旨

日時：1990年3月10日(土) 13:30-16:30

場所：上智大学7号館第3会議室

出席：細野、中川、アンドラーデ、国本、松下、山田(書記)、他委任状3、恒川大会準備委員長(オブザーバー)

審議事項：

- 1) 前回議事録確認
- 2) 記念事業案：i) 会員名簿および著作記録に約50万円、ii) 機関別雑誌所蔵記録に約10万円を予定することが了承された。
- 3) 次期大会：(恒川氏臨席)プログラム案とシンポ企画書が恒川大会準備委員長から提出され、討議の結果、i) 分科会は、2つにおさえる、ii) シンポのための準備会議を行うため、予算は既定の30万円の枠に10万円を実費主義で追加支給する、iii) 記念講演は、初日総会前に行い、米国人3人のシンポ方式とする、iv) 前年度会費未納者、再選理事の氏名一覧は、事務局が用意する、v) プログラムの具体的な内容、時間など、vi) シンポジウムのテーマは、「日本におけるラテンアメリカ認識とラテンアメリカ教育」とすることなどが決まった(以上で恒川氏退場)。

- 4) 年報編集：松下理事から編集状況が報告された。
- 5) 理事選出方式の変更案：理事長から来る総会に提案する理事会案の追加提案があり、次回理事会(大会初日)で最終的にまとめることになった。
- 6) 国際交流：外国学会への会員、理事などの参加に関して、学会が行いうる支援方法について討議の結果、財政的支出を行わないという従来の方針維持が決まった。
- 7) 入退会：i) 退会の申し出が1件あり、承認された、ii) 6名新会員の入会が承認された(別項記事参照)。

## 2. 会員活動報告

○東日本部会研究会からの報告

三田千代子

1989年度後期東日本部会研究会が1990年3月31日(土)午後2時より上智大学において開催され、修士、博士論文を中心に下記3研究報告が行われた。

1. 谷井晃裕「累積債務問題—その起源、現状と問題点」

1989年度上智大学大学院に提出された修士論文の一部が報告された。

発展途上国において債務が対外債務問題となる諸要因を分析考察した後、82年以後のメキシコの例を中心に累積債務問題における債務国、国際機関、民間銀行それぞれの対応と役割が考察された。1989年3月にブレイディ構想が債務救済措置として登場するまでの諸状況が提示されたと同時に、メキシコの累積債務問題におけるブレイディ構想の役割と意義が明確にされる報告となった。

2. 石井利明「ハリスコ高地における“カトリコ”の反乱—農民の世界と農民反乱—」

— (社)ラテン・アメリカ協会 —

外務省の外郭団体で、対中南米民間外交の中核的機関として昭和33年に発足した。

当時、ラテン・アメリカ諸国は国連その他の国際機関等の場で急速にその重要性を高めてきており、また、これら諸国と我が国の関係も、経済、技術、情報、文化および人的交流、移住その他の各分野で急速に緊密の度を増している中で、我が国朝野の中南米に対する理解と認識は加速度的に深まりつつあった。

このような状況に対応するため、政府は昭和33年に初めて外務省のラテン・アメリカ関係外郭団体に対し、その活動強化のため補助金を交付することとなり、それとともに、政府および関係者の間で、財界、政界、文化界その他国民各界からの積極的な協力を得て、既存のラテン・アメリカ関係団体として活発な活動実績を挙げているラテン・アメリカ中央会のみならず、ラテン・アメリカ調査会、パン・アメリカン協会等の構成メンバーをもって、中南米地域全体を対象とする総合的で強力、清新な民間外交中核機関、社団法人ラテン・アメリカ協会を設立するとの方針が打ち出された。こうして昭和33年6月14日、藤山外相臨席のもと政・財界の代表者96名によりラテン・アメリカ協会設立発起人会が開催された後、同年7月1日、吉田首相を名誉会長、足立日本商工会議所会頭を会長に当ラテン・アメリカ協会が発足した。以来、歴代の日商会頭が当協会の会長を務めてきており、現会長は昭和63年6月に就任した石川六郎である。

その間、事業活動面では、昭和37年海外技術協力事業団の創設に伴ない、技術協力関係部門が同事業団へ分離・吸収された以外は大きな変動はなく、所期の目的を達成しつつ現在に至っている。

当協会は、日本とラテン・アメリカ諸国との間の経済、技術、文化などの面での協力提携の緊密化を図り、友好親善の増進に寄与することを目的とし、さまざまな事業活動を行っている。調査広報の面では、ラ米各国や関係国際機関から諸資料を入手・整備し、調査研究を行い、主要な柱の一つ

として機関誌「ラテン・アメリカ時報」(月刊)を発行。ラ米諸国の政治、経済、社会、文化等各分野について、速報の要請に応えつつ、最も正確な信頼すべき情報伝達を主旨としている。これに加えて、現地や国内の権威ある経済、法律等の研究者、専門調査機関による調査研究等を含む不定期の資料発行も行っており、設立以来1989年までの刊行物は280点以上に達する。特色あるものとしては、我が国の産業経済事情や対外経済関係、経済技術協力の現状を主にラテン・アメリカ諸国の人々に的確かつ効果的に紹介するための年刊スペイン語誌

Panorama de la Industria y la Cooperación Económica del Japón (「日本の産業と経済協力の概観」)が挙げられよう。また、通例5年ごとに改訂される「ラテン・アメリカ事典」は、外務省および我が国の学者、研究者の協力のもとに、地域全体と各国の政治、経済、文化、社会、地理、歴史、我が国との関係などの各部門を網羅する総合的な権威書として高い評価を得ており、これまでに1961、64、68、74、79、84、89年版を発行した。

他方、外務省はじめラ米関係の権威者を講師に迎えての、時局問題をテーマとする講演会、ラテン・アメリカ人の目を通して我が国の実状を紹介するテレビ番組の制作、第一線の研究者、実務家をメンバーとする日本-ラ米関係研究会、在日ラ米諸国公館との親善交流活動等を行い、また「中南米諸国二世指導者研修計画」や「日墨研修生・学生等交流計画」も実施している。

サービス・センター室では、当協会研究部顧問その他専門家の協力も得て、会員の方々からの問い合わせに応じているほか、資料閲覧コーナーにラ米関係の図書や諸資料を備え、会員はじめ一般の方々の利用に供している。(平日9:30~12:00、13:00~17:00 日・祭日および第2・第4土曜日は休み)。(橋本 芳雄)

〒150 東京都渋谷区神宮前2-6-14

第2神宮前ビル3階

TEL. 403-2661, FAX. 403-2662

1989年度千葉大学大学院に提出された修士論文の一部が報告された。メキシコ革命後、革命政府がとった反教権主義政策を契機として起こったハリスコ高地の農民反乱を、地域共同体と国民国家制度の乖離の問題として考察した報告である。

ハリスコ高地の農民の世界はカトリックの祝祭日を基盤に秩序付けられており、種々の農作業の時期は宗教行事によって決定されていたことが反乱の背景として指摘され、革命政府のとった反教権政策が農民の世界観そのものを破壊することになったために起こったのが、「カトリコ」の反乱であるとして分析考察された。

### 3. 中村由子「メキシコの輸入と輸入品の分配—1767年～1810年—」

現在コレヒオ・デ・メヒコで執筆中の博士論文の一部が報告された。銀鉱業の発展によって18世紀末から19世紀始めにメキシコで自立的内部的経済発展がみられたことを輸入品の増加と多様化によって分析指摘しようとした研究である。

メキシコに残されている古文書の中からこの時代の貿易に関する資料を収集しそれを分析考察する作業を通じて、今回は繊維製品の輸入が当時の宗主国スペインを通じてのみではなく、マニラからもアジア産の綿織物が輸入されており、こうした輸入品を消費する市場がメキシコには銀山の開発によって形成されていたことを指摘することが試みられた。

以上3報告の研究対象地域はいずれもメキシコではあったが、扱っている時代、アプローチ方法、テーマいずれにおいても多様であった。この結果、研究分野の異なる方々の出席があり、視点の異なる立場から示唆に富む意見が出され、大変活発な議論が展開された。予定時間30分を超えての閉会となった。出席者は15名であった。

#### ○国連ニカラグア選挙監視団に参加して

狐崎 知己

さる2月25日のニカラグア総選挙では、大方の予想を覆して、国民野党連合がサンディニスタ民族解放戦線(FSLN)に得票率で約14

%の差をつけ勝利を収めた。投票率は86.23%を記録した。

この選挙は、主権国家における初の国連監視下の選挙として、また、東欧諸国に先駆けて革命政権が自らの正当性を国民に問うことから、国際的にも大きな注目を集めた。さらに、今回の選挙が公正に実施され、その結果が尊重されるかどうかは、ニカラグアにおける準権威主義体制から参加民主主義体制への移行およびコントラの解体という内戦終結のための必要条件の達成のみならず、中米諸国の内発的地域平和構想としてのグアテマラ合意(エスキプラスII)を実現していくうえでも、重大な政治的意味をもっていた。

このため、国連や米州機構をはじめとする種々の国際監視団に、世界各国から多くの中南米研究者が参加した。本学会から田中高氏と筆者の2名が参加した国連監視団は、有権者登録から選挙運動、投・開票、集計にいたる半年間の選挙プロセス全体の監視と検証に当たった結果、自由かつ公正な選挙であったとの判断を下した。

私は、マタガルパとヒノテガ両県からなるニカラグア北部の第5地区を基盤に10日間の監視活動を行なったが、ここでは2千名強のコントラの攻撃のために8か所の投票所が閉鎖されたことを除いて、4百数十か所の投票所において、きわめて平穩に投・開票が遂行された。各投票所の選挙管理委員長は、おしなべて勤勉かつ実直な人柄で、その多くは女性や若者だった。与野党の立会人も、公正できれいな選挙を実現するために、ほぼ二昼夜にわたる投票から開票、集計への協力を惜しまなかった。

今回の選挙結果を、親米派の勝利や米国政府の勝利と規定したり、東欧と同一視して革命に絶望した民衆の反乱などを見なす論調が多いが、私は、半年間の選挙プロセス全体が欧米の基準から見ても公正できれいに遂行されたことを何よりも重視したい。8年間の内戦の下で極度に社会が分極化したといわれてきたニカラグアにおいて、有権者登録の準備から開票・集計に至る選挙プロセスを公正に運営するには、与野党の相違を超えて幅広い

階層、とりわけ農村部の人々の自覚的な協力が不可欠であった。

ニカラグアでは、他の中米諸国に比して民族の誇りと自己の尊厳に対する価値意識が民衆一般の間で非常に強かったが、これに加えて、彼らは今回の選挙プロセスを通して参加民主主義のもつ価値を経験として学びとったといえよう。

グローバル・システムでの緊張緩和が進むなかで、地域サブシステムとしての中米の持続的平和と発展は、クアテマラ合意の実現にかかっている。ニカラグアで公正な選挙が実施され参加民主主義の基礎固めが行なわれたことにより、内戦の続くエルサルバドル及びグアテマラ両国政府は、民族和解と社会正義の実現をうたうグアテマラ合意の履行を迫られている。

サンディニスタの敗因ないし野党連合の勝因を論ずるには、10年間の革命プロセスをグローバル・システム、地域サブシステムそしてニカラグア国内の三次元から分析すると同時に、中米紛争を長期的構造変動の文脈から捉える歴史的視野をもった研究が必要とされる。この他にも、ニカラグアにおいて実験された混合経済のもつ政治的経済的問題点、FSLNにおける党と大衆組織の関係、中央と各地域の権力構造、周辺国における革命的変革の可能性、今後増加が予想される日本の中米援助政策等々、思いつくまま列挙しただけでも数多くの研究課題が存在する。日本における中米研究のさらなる活発化を望みたい。

### 3. 学術・文化情報

#### ○「第6回中南米におけるアジア・アフリカ研究の国際会議」の報告

(Sexto Congreso Internacional de la Asociación Latinoamericana de Estudios Afroasiáticos)

Virginia Meza

1975年にメキシコで設立された中南米におけるアジア・アフリカ研究協会 (Asociación Latinoamericana de Estudios Afroasiáticos) というのはアジア・アフリカを専攻す

るラテンアメリカ研究者が集う学会であり、メキシコ国内での定期的な会議の他に2年ごと中南米の主要な大学あるいは研究センターで国際会議を開催する。

1989年9月5日から8日までの間、キューバのハバナ大学で第6回中南米におけるアジア・アフリカ研究の国際会議が開催された。アルゼンチン、コロンビア、ブラジル、ペルー、メキシコ及びスペインと日本からおおよそ220名の研究者が参加し、総数250の研究発表が行われた。

4日間に亘って記念講演を初め、特別講演、そして4つの研究分野に分けた会場で数多く研究発表が行われた。それは1) ラテンアメリカにおけるアジア・アフリカ研究、2) 現代アジア・アフリカ、3) ラテンアメリカで見られるアジア・アフリカの影響と存在、4) ラテンアメリカにおけるアジア・アフリカに関する教育、情報などの現状という会場だった。

発表は多過ぎたため10分以内とされ、かなり限られた時間で実行された。アジア・アフリカ各国の発展、経済、政治、国際関係をテーマにした発表があり、またラテンアメリカとアジア・アフリカの国々の相互関係及びラテンアメリカの高等教育機関で研究されるアジア・アフリカあるいはラテンアメリカのマスコミに見るアジア・アフリカの現実などを取り扱った研究発表が注目をひいた。

記念講演として自国の指導的な役割を果たしたHo Chi MinhやNehruという人物を中心にした講演があった。それにナミビアの独立及び環太平洋地域をテーマにしたパネルディスカッションも行われた。

ここ数年のラテンアメリカにおけるアジア・アフリカ研究の発達を確認できたと同時に、若手の研究者の参加が目立った。この会議はラテンアメリカ人研究者の交流の場であり、その地域で行われているアジア・アフリカ研究の現状を知るには最も有益な機会だと言える。

#### ○LASA大会出席の記 小林 志郎

(パナマ運河代替案調査委員会)

当初9月24日から26日までの学会は、その

## 海外ラテンアメリカ研究センター紹介 (7)

### — ペルー - 国立図書館 —

ペルーの国立図書館(Biblioteca Nacional)は、リマの中心部に位置するペルーで最も重要な図書館である。最も重要と言っても、さほど本や雑誌が揃っているわけではない。むしろ揃っていないと言うべきであるが、他の図書館と比べれば比較的ましである。以下に述べるのは、筆者が1983年から86年にかけてこの図書館を利用した体験記である。

国立図書館は決して使いやすい図書館ではない。利用するには利用証を得る必要がある。利用証は中高生に交じて一般用のをもらうこともできるが、筆者は20ドルほどのお金を払って“Investigador”用の利用証(2年間有効)を得た。この利用証があると“Sala de Investigaciones”を利用できる。“Sala de Investigaciones”にも若干の書籍類があるが、大したコレクションがあるわけではない。筆者は軍に関することを調べていたので軍関係の“Colección de Volantes”をみせてもらったが、役に立つものは一つもなかった。しかしこの部屋の係員は愛想がいい。

国立図書館のあるアバンカイ通りは中央市場に近く、強盗はともかくひったくりの類が結構多い場所なので注意が必要である。図書館の開館時間は午前9時から午後8時まで。これはかなり正確である。また、クリスマス後に蔵書点検と称して1カ月ほど閉鎖するが、筆者がペルーに留学していた3年間のうち1年間は、半年も閉鎖されていた。その他、職員の集会などで臨時に閉鎖されることがあるが、事前の掲示は一切ない。

図書館に入るには、荷物を預かり所に預けなければならない。持って入るのを許可されるのは「ボールペンと数枚の紙」だけである。これはかなり厳格で、例えば閉じたノートを持ち込むことは許されない。実際に新聞のページが切り取られていたり引き裂かれていたりするので、不心得者から蔵書を守るためには仕方がない措置かも知れないが、研究者の立場からすればこれは

二重の意味で困る。第一に、本を持ち込んで図書館の書籍と対照させたくてもそれができない。第二に、閲覧を希望した書籍を待っている間に自分の本を読んで暇をつぶすことができない。待ち時間は新聞雑誌室で20分ほど、一般書籍を所蔵している

“Sala Perú”で30分以上と考えた方がいいからこれはかなりの時間の無駄である。

(まだ見つかる本なら古本屋をあさった方がはるかに効率がいい。) 幸い、“Sala de Investigaciones”の利用者には、事前に予約すれば、他の部屋が所蔵する書籍を“Sala de Investigaciones”まで運んでおいてくれるという特典があった。これは大変貴重なサービスである。しかし筆者の場合は閲覧したい新聞・雑誌の数が多かったため、人手がないという理由で途中から断われた。結局筆者は、研究上必要であるという理由で「新聞雑誌室に本1冊とバインダー1冊の持込みを許可する」という内容の30日間有効の許可書を発行してもらい、その都度それを更新するという形で対処することができた。

国立図書館にはコピー・サービスがあるが、これも利用しにくい。僅かの量のコピーを頼んでも数日かかるし、少量が多いと2週間くらい飛ばされたりする。コピーの台数不足や人員不足という事情があろうが、短期間に大量のコピーが必要な研究者には向かない。筆者は、留学から帰国する直前にどうしても大量のコピーが必要であったので、せっぱ詰まって手当を払うから残業をしてくれないかと係員に申し出た。すると、すべてのコピーを1日か2日でやってくれた。本当に残業してくれたのかどうか筆者は知らない。もしかしたら他のコピー申し込み者を後回しにする結果になったのではないかと今でも後ろめたい気がする。

以上が筆者の国立図書館利用体験記である。もう3年半前のことなので、現在は事情が変わっているかも知れないことを付記しておく。国立図書館電話 287690

(大串 和雄)

2日前、会場のサンファン市(プエルトリコ)が、ハリケーンに直撃されお流れとなった。かなりの人が、途中で足止めを食い、泣く泣くUターンせざるを得なくなったようだ。事務局のその後の尽力もあり、再度12月4日から6日まで、マイアミでの開催となった。

ワークショップの数だけで約300コマ、アカデミズムもアメリカではショーになりうるというサンプルである。平均5人のパネリストとしても、1500人が積極的発表者である。聴く方は、早朝7時から夜の9時まで、途中、昼食の1時間を除き、13時間ぶっ通しで出席しても、3日でせいぜい全体の1割の30パネルにしか出席できない勘定になる。その上、終日上映のLA映画ものぞいて見たいし、100店にも及ぶ書籍コーナーの新しい出版物にも関心がある。2日目の後半からは、1000点近い発表者のレジメのコピーも即売され、全く息もつかせぬ学会であった。私自身が出席できたパネルだけからの印象記は、象の足をなでたようなものである。

文学や歴史など地道なテーマも多かったが、最近のソ連・東欧の内部変革とLAへの影響、ニカラグア、サルバドル、そしてパナマでの紛争の行方などカレントなテーマが沢山の聴衆を集めていた。そのものずばりの「パレストロイカとLA」というパネルでは、聴衆の割に予定のパネリストが欠席で1人のパネリストの報告となった。急速に進展する世界史的現象の体系化の難しさを物語っていた。キューバとニカラグアの革命の比較というパネルではキューバのパネリストだけでニカラグアのパネリストは不在であった。ニカラグアの2ヶ月後に迫った選挙に与える影響を配慮しての欠席ではないかとの憶測が流れていた。ソ連圏での新潮流は、従来の“体制論”をさらに陳腐化させ、LAにおいても、経済開発の効率性からの視点に議論が集約される可能性が強まることを予感させた。

中米地域紛争に関連したパネルでは、ほんの数週間前のサルバドルでのイエズス会士の殺害事件もあり、一種の緊迫感が漂っていた。イエズス会関係者のパネリストは、燈明を死者の遺影の前に立て、聴衆も1分間の黙とうと

なった。喪服姿の女性による涙ながらの現況報告はこの地域研究者の厳しい現実を語りかけるものとなった。それにしてもアメリカ人によるこの地域への研究者の層の厚さは異常と思える程である。(モンロー主義の変型?)

パナマ事件のパネルは3日間の会期のほぼ最後であったにもかかわらず、聴衆であふれていた。パネリストの中には、つい数週間前まで、在パ・アメリカ大使館の参事官で、OASの米代表になった現職の外交官もいた。全員アメリカ人パネリスト(5人)による、軽いジョークを飛ばしながらのサロン談話風の発表に、フロアーの人々は次第にフラストレーションを高めていたようだ。アメリカの大学で教鞭をとるといふパナマ人のドクターがいきなり、激越な調子で、「貴方達は、パナマ研究で博士号をとり、メシを食っているようだが、本当にパナマ問題を解決する視点を持ち合わせているのか!」と。アメリカの経済制裁により、行き場のなくなったパナマ人の怒りを代弁するかのような追求にパネリストが青ざめるといふ一幕もあった。「アメリカはもはや、パナマ運河にも、南方軍基地にも重要性を感じていない」との元参事官の発言に対し、「それならば、なぜ経済制裁までしてノリエガを追求するのか」という皮肉まじりのLA女性の指摘に、前言を撤回するという事態もあった。今回の学会の直前、ブッシュ米大統領が、パ国籍船入港禁止措置を決定したことに対し、ノリエガ将軍は、シモン・ボリバルの「アメリカは自由の名の下に、LAを貧困化させる宿命にある」という文句を引き合いに出していたことを私は想い出していた。最終日の別れ際に、ニカラグアの知人から、「今年中にアメリカは、ニカラグアと関連させる意味で、パナマに軍事介入を行う可能性が強い」という情報を聞かされた。

どのようなルートで得た情報かを問い正すいとまはなかったが、その2週間後、対パ軍事進攻は現実のものになり、更に2月のニカラグアの選挙の結果となった。

LASAの中米関連パネルでは、地域の貧困問題等の解決への議論も「北の巨人」との関係悪化という影の下で、突破口の見つから

ない議論に終わっていた感がある。今回のパナマ、ニカラグアでの新しい政治状況が、中米地域発展への新しいテコになりうるかは速断しかねるが、一世代以上に亘る地域紛争がこれにより解決し、域内協力が確立される政治基盤が準備されつつあることは確かのようにある。このような意味からも、「日本、アメリカ、LA—新しいトライアングルを求めて」という日本LA学会関係者によるパネルは、米・ECに対し第3のパワーとして中米諸国から見られている日本の同地域への新しい協力パターンが示唆されるものとして期待されていただけに、ハリケーンの影響で流れてしまったのは心残りであった。

#### 4. 近着会員業績

〔抜〕角川雅樹「Puerto Rican Syndrome と Espiritismo—植民地と攻撃性の問題から—」『精神医学』第31巻第7号、1989年、医学書院。

〔抜〕角川雅樹「グアドループ」『人間の場から』第16号、1989年（東海大学留学生教育センター）。

〔抜〕角川雅樹「マルチニーク」『人間の場から』第17号、1989年（東海大学留学生教育センター）。

〔抜〕角川雅樹「ドミニカ」『人間の場から』第18号、1990年（東海大学留学生教育センター）。

〔抜〕角川雅樹「メキシコにおける家族—メキシコ人心理の分析から—」（『ラテンアメリカの家族構造と機能に関する研究』総合研究開発機構、1989年5月）。

〔抜〕角川雅樹「プエルトリコにおける家族」（同上）

〔抜〕畑恵子「メキシコ人口政策と家族」（同上）

〔冊〕青木芳夫「世界史のなかのハイチ革命」（『資料ラテンアメリカ』第12号）、ラテンアメリカ資料センター、1989年11月。

〔抜〕内多允「チリの化学工業—期待される製造業の発展—」（『化学経済』Vol. 37, No. 1, 1990年1月）

〔抜〕内多允「パナマを揺がす麻薬と運河」（『状況と主体』第170号）1990年2月、谷沢書房。

〔抜〕浅香幸枝「ペルー社会における女性労働と家族」（『ラテンアメリカの家族構造と機能に関する研究』総合研究開発機構、1989年5月）。

〔抜〕浅香幸枝「女性・子ども・本（ラテンアメリカ）」（『JBBY会報』43号、日本国際児童図書評議会、1987年5月）。

〔抜〕浅香幸枝「ラテンアメリカ 子どもの本の旅—メキシコ・キューバ・アルゼンチン—」（『JBBY会報』49号、50号、51号、52号、日本国際児童図書評議会、1988年11月～1989年8月）。

〔籍〕浅香幸枝共編『海外で翻訳出版された日本の子どもの本』Oreerseas Editions of Japanese Children's Books（日本国際児童図書評議会、1988年5月）。

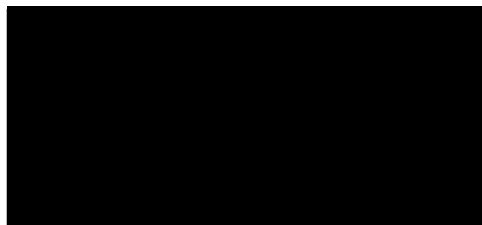
〔籍〕落合一泰 *Meanings Performed, Symbols Read: Anthropological Studies on Latin America, Performance in Culture No. 5, Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 1989.*

〔抜〕三田千代子「ブラジルの家父長家族の成立と展開—ジルベルト・フレイレの説論をめぐって—」（『ラテンアメリカの家族構造と機能に関する研究』総合研究開発機構、1989年）。

〔抜〕三田千代子「日本とブラジルを結ぶ日系人移住者の80年」（『外交時報』外交時報社、1990年2月）。

#### 5. 事務局から

i) 新入会員（第44回理事会承認）



第11回定期大会のお知らせ

期日：6月2日(土)、3日(日)

会場：東京大学教養学部

プログラム：講演会およびシンポジウム

の詳細は本会報の理事会報告を御参照  
下さい。

No. 3 3

1990年4月20日発行

〒305 茨城県つくば市天王台1-1-1

筑波大学社会工学系細野昭雄研究室内

日本ラテンアメリカ学会事務局

☎ 0298-53-5067